

社会進出するマレー人女性

三木 敏夫*

イスラム法では親からの遺産相続は男2に対して女1となっているが、慣習法（アダット）を重視するマレーシアでは、男女均分相続が一般的になっている。イスラム教といえど一夫多妻制に代表される男尊女卑を思い浮かべがちであるが、何度もマレーシアを訪問して感じることは、実態はかなり女性の地位が高いことである。

マレーシアでは、1980年代に入り、イラン・イスラム革命の影響を受けて、マレー人女性の中でスカーフをかぶり、民族衣装であるバジューロンを着ている女性が圧倒的に多くなった。公立学校のマレー人女学生の制服は、今も白いスカーフと青色のバジューロンである。この光景をみる限り、マレー人女性の権利は抑圧され、女性の社会的地位は低いように見えてしまう。しかし、一歩マレー人社会に入り込むと事情はかなり異なっているようである。

スカーフを例に取れば、中東諸国の女性の中には黒のスカーフに刺繍を楽しんでいる中年女性を見かけることもあるが、圧倒的に黒一色のスカーフ（中東諸国ではチャドールといわれ、イランではヘジャブといわれる）をまとっているのに対して、マレー人女性のそれは赤あり、青あり、黄色あり、柄物ありで非常にカラフルである。今回クアラルンプールで宿泊したホテルでは、時期的に長期休暇を利用して中東諸国からの旅行者の多くと同

宿することになった。女性が黒装束に身を包み、目の部分だけ開いたチャドールをかぶり、10人前後のグループを形成し、ホテルのロビーでチェック・インを待つ姿を見るにつけて、一種異様な雰囲気映ったし、イスラム教の厳しい戒律を彷彿させるものがあった。マレー人女性のカラフルなスカーフを見慣れた目には、このような感情に陥ったことはこれまでなかった。

とにかく、マレー人女性は毎日カラフルなスカーフを取り替える余裕を持つ人が多く、スカーフは彼女達にとっておしゃれを楽しむ大きな小道具になっていることに気がつく。時にはスカート姿でオフィスに出勤することもある。スカーフを強制され、女性の社会的地位が一見低いように見えるが、実はおしゃれの小道具としてスカーフをつける心意気は、イスラムの戒律の範囲でおしゃれを楽しむマレー人女性の人生観の豊かさを感じてしまうほどである。そこにはイスラム教の厳しい戒律のイメージはない。

また、マレーシアを訪問して感じることは、マレー人女性はマレー人男性よりも働き者であることである。工場では重い製品を取り扱う特殊な現場を例外とし、作業現場では若い女性が多数働いている。日系企業の進出ラッシュが始まった1980年代後半、テレビやク

* 札幌学院大学経済学部

ーラー、電子製品の組み立て現場では、千人を超える従業員の内その90%以上が18歳から20才前半の女性で占められた。現在では若干平均年齢が上がっているようだが、依然として圧倒的多数の女性従業員が工場で働いている。男性従業員を探すのが難しいくらいだ。女性の社会進出を嫌うイスラム教にとって、本当にマレーシアの国教がイスラム教であるのか疑いたくなるくらいである。

女性が千人以上集まるわけだから、特殊な事情がない限り、この人数に見合ったマレー人男性がいるわけだが、こうしたマレー人男性は日中何をして過ごしているのか、毎度マレーシアを訪問するたびに沸きあがってくる単純な疑問の一つである。日系企業の人事担当者の方に質問しても明確な答えは返ってこない。返ってくるのは、マレー人女性は献身的でおとなしく、従順であり勤勉で働き者であるということだけである。それでも、担当者の方が、毎朝夕、貴重な交通手段であるオートバイや車で、奥さんないし娘達を工場に送り迎えするマレー人男性が結構いると教えてくれたことがある。

2001年にマハティール首相がマレー人に留保されていた大学入学定員枠の変更を検討すると発表し、マレー人社会に大きな衝撃が走った。同首相によれば、問題なのはマレー人女子学生ではなくマレー人男子学生の勉学意欲が非常に低いことで、現状を放置すればマレー人大学生の半数以上を女子学生が占めてしまうことである。この傾向はマレーシアに限らず、日本でも女子学生の勉学への取り

組み姿勢がまじめなのに対して、男子学生のふがいなさを思い起こさせるものがあり、ついつい他人事とは思えないものを感じてしまう。男子学生の奮起を期待したいところだ。

マレーシアでの女性の社会進出は、日本人が想像している以上に活発であり、優秀でもある。ある面で、日本よりマレーシアの方が女性の社会的進出が進んでいるといっても過言ではない。

事実、筆者のマレーシア駐在時代、仕事のカウンター・パート（マレーシアの政府関係者）の半数近くがマレー人女性であり、部長、局長の要職についていた。彼女らは誠実で、こちらの意向を汲んでうまく計画を立て、パートナーとして仕事をそつなく取りまとめる能力と専門性を有していた。単純比較はできないが、日本の女性の社会進出（管理職や専門職）はマレーシア以上に少ないのではないかと思ってしまう。つくづくマレー人女性の旺盛な生活力を感じざるを得ない。

ある日系企業がクアラルンプール株式市場に上場を計画した際のことである。日系企業としてできる限りマレー人比率を低く抑え、日本側の出資比率を大きくしたかったわけであるが、ブミプトラ政策によりマレー人に30%の株式を譲渡しなければならないので、マレーシア政府とその最終的比率を交渉した。政府が指定した政府関係機関と交渉を行った時、会議に出席したマレー人側出席者8人のうち6人がマレー人女性で、男性は2人だけであった。この内1人は書記であった。何回か交渉を繰り返したが、結論が出ず、日系企

業の社長はいつものメンバー以外に最終的権限をもっている男性はいないのかとマレー人側に尋ねた。これに対してメンバーから、我々が最終権限を持っており、関係部門との利害調整に時間がかかっているだけであるといわれ、会議室から外に出て待っているようにとの指示があった。再び入室し、その場で最終決定が告げられたのには驚いたとのことである。日系企業の社長は、マレー人社会でのマレー人女性の優秀さと、外見ではわからない女性の地位が非常に高いことをこの経験から学んだとのことであった。

また、今回マレーシア国民大学 (UKM) の経済学部と経営学部を訪問した。経営学部長は博士号を持つマレー人女性であった。日本でも最近では学校運営に携わる女性の学部長や学長が見られるようになってきたが、まさかイスラムの国、マレーシアでは想像もできなかったことである。

マレーシアでは、教職につく男女比率は、教員の給与が安く男性が教職を敬遠するので工場と同様に圧倒的に女性が多い。ペスタロッチが主張した母性教育の重視がマレーシアでは実践されている。

2001年夏、無計画に産休をとる女性教員が多いことを憂えて、教育大臣は一貫した教育を行うために計画的に出産するように、との談話を発表した。この談話にすかさず反応した女性教員は「子供は自然の営みによるもの」と簡単に一蹴、その後この話は立ち消えてしまった。イスラムのイメージでは考えられない、しっかりと自己主張をするマレー人

女性像が浮かび上がってくる。

クアラルンプールの近代化は LRT に代表される。市内のモータリゼーションを緩和することを目的に、数年前から営業を開始している。同交通システムの開業は、市民を暑さとジャングルから解放し、生活行動範囲を著しく拡大している。筆者も、滞在中ホテルの近くの駅からツイン・タワー (KLCC 駅) 内のスーパー・マーケットに買い物に出かけるため、電車をよく利用した。利用客の大半はマレー人であった。夕方の帰宅時は、東京の通勤ラッシュに勝るとも劣ることのない混雑を呈する。積み残しがしばしば起きる。

最近、東京で痴漢防止を目的として女性専用車を導入した私鉄が評判となった。日本にいれば男女が入り混じった車内の混雑があたりまえとなっている光景が、クアラルンプールでもみられる。

マレー人男女が肌を触れる社内の混雑を見るにつけて、マレーシアのイスラム教は中東諸国のそれと大きく異なっていると感じざるを得ない。況マレーシア・イスラム党 (PAS) がマレー人の間で 1999 年 11 月の総選挙以降、支持を拡大している理由も、何気ない日常に目にする車内の混雑に求めることができるのではないのか、と感じる。

高層ビルが林立し、町並みも美しいマレーシアはもう少しで先進国の仲間入りができる状況にある。経済の発展とともにコーランの教えがマレー人女性の社会的地位にどのような影響を与えていくのか、と考えながら、今回帰途についた次第である。